

<総括>

出題数	現代文 1題・古文 題	試験時間	75 分
-----	-------------	------	------

グローバル化する現代において、文化は一つの本質に固定されることなく絶えず流動的に変化しつつある。そのような文化を捉えるためには、自分の文化と他者の文化を総体的に把握する「文化の翻訳」という方法が必要であることを主張した文章。

問三は「バベルの塔」についての理解が絡むため、受験生にとってはややわかりにくい問題だったかもしれない。問五は空欄Ⅰ・Ⅱとも正解が決まりにくく、受験生は悩んだかもしれない。前年度と異なり脱文挿入型の問題は出題されなかった。

<本文分析>

大問番号	一
出典 (作者)	『森鷗外「翻訳」という生き方』(長島要一)
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・ 変化なし ・やや増加・増加) 4000字程度
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
一	評論	問一	マーク式	標準	漢字の書き取り(4題「触手」「至上」「頻繁」「普請」)
		問二	マーク式	標準	漢字の読み取り(4題「膨大」「否応」「軋轢」「歪曲」)
		問三	マーク式	標準	傍線部の理由説明
		問四	マーク式	標準	傍線部の内容説明
		問五	マーク式	やや難	空欄補充二つ(解答が決まりにくい)
		問六	マーク式	標準	傍線部の内容説明(適当でないものを選ぶ)
		問七	マーク式	標準	語の意味説明(「アイデンティティー」→「自己同一」)
		問八	マーク式	標準	語の空欄補充(「いとも」)
		問九	マーク式	標準	傍線部の理由説明
		問十	マーク式	標準	傍線部の内容説明
		問十一	マーク式	標準	傍線部の理由説明
		問十二	マーク式	標準	傍線部の内容説明
		問十三	マーク式	標準	文学史の問題(夏目漱石『明暗』)
		問十四	マーク式	標準	傍線部の内容説明

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・文脈を的確にたどりながら、本文の論旨を正確に把握できる堅実な読解力を養っておくこと。
- ・設問対策としては、本文の内容に基づいて正解と誤答を見きわめる選択肢問題の練習を十分に積み重ねておきたい。また、出題数の多い漢字問題や語彙問題で点数を取りこぼさないよう、早い時期から現代文の基礎的知識を涵養しておこう。

<総括>

出題数	現代文 題・古文 1題	試験時間	75分
-----	-------------	------	-----

本文は、鎌倉時代の説話である『宇治拾遺物語』からの出題であった。受験生にとって馴染みのあるジャンルからの出題であり、本文の展開はわかりやすいものであった。設問は基本的な学習を基軸とした文脈上の理解を要求するものから構成されており、受験生にとって学習の成果を測定しやすい問題であった。また、昨年に見受けられたことわざの語意を問う設問は用意されていなかったが、現代語の語彙力を要求する設問が見受けられた。本文の分量は前年よりやや減少、総設問数は1問減少(前年度は14問)であったが、出題の形式は例年通りであった。全体的には本学古文の典型的な出題形式、すなわち、「基本的な知識と読解力を試す」点を踏襲している。なおほぼ同一箇所が2017年に同志社大で出題されている。

<本文分析>

大問番号	二
出典 (作者)	『宇治拾遺物語』(编者未詳)(卷第十二・二十一 ある上達部、中将の時召人にあふ事)
頻出度合 ・的中等	頻出
分量 前年比較	分量(減少・ やや減少 ・変化なし・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
二	説話	問一	マーク式	やや易	空欄補充。「宮中」を意味する言葉を空欄に補充する。
		問二	マーク式	やや易	書き付け。「ゐて行きけるを」の「ゐ」にあてる漢字を問う。
		問三	マーク式	標準	語句の意味。「よしなき」「けうとく」「さかしら」「きびはなる」「あからさまに」を問う。特に「さかしら」では現代語の語彙力が要求されていた。
		問四	マーク式	標準	人物判定。3カ所の「男」に対して、同一人物か別人かを問う。
		問五	マーク式	やや易	空欄補充。「懲りずまに」の意味になるように「 性 懲りもなく」の空欄に入る語を問う。現代語の語彙力が問われた。
		問六	マーク式	標準	解釈。「別の事もなきものにこそ」を問う。引き続き「乞ひ許してやり給ふ」を踏まえて、「別の事」「にこそ」の結びの語を具体化する。
		問七	マーク式	標準	解釈。「事よろしくは」を問う。直後の「乞ひ許さん」を含めて考える。問六と同意表現となっていることに着目してもよい。
		問八	マーク式	標準	説明。「後ろよりかきすくひて、飛ぶやうにして出でぬ」において、男がその場で中將を取り返そうとしなかった理由を問う。第五段落にある男の発言「そこにて取り参らせ候はば、殿も御傷などもや候はんずらんと思ひて」に着目する。設問文が本文の展開を一部提示していた。
		問九	マーク式	標準	空欄補充。「御恩報ひ参らせ ばや と思ひ候ひつるに」「告げ参らせ ばや と思ひながら」に共通して入る言葉を問う。中將に救われた男の発言であることを踏まえる。
		問十	マーク式	やや易	文法。「いかに恐ろしく思し召しつらん。おのれはその月その日、からめられてまかりしを」に含まれる助動詞の数を問う。
		問十一	マーク式	標準	解釈。「我が身かくて候へば」を問う。「かくて」の具体化、「候へば」の訳出、述部の補充に着目する。
		問十二	マーク式	標準	内容合致。5つから1つを選ぶ。これまでの、6つから2つを選ぶ形式から変わった。
		問十三	マーク式	標準	文学史。藤原公任の編纂した書物を問う。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

<ul style="list-style-type: none"> ・古語と古典文法を押さえたうえで、主体や客体の補充、指示内容の特定などを適宜行いながら、文脈を把握する練習を積むこと。過去問などの演習を通じて養成するとよい。 ・いろいろなジャンルの文章を読み慣れて、細部の知識にばかりとらわれず、全体的なストーリー展開や作者の評言などを理解したうえで、内容をまとめる練習を積むこと。 ・古典常識や文学史などについてもしっかり学習しておくこと。 ・和歌に関しては、和歌が詠まれた状況を読み取ったうえで、修辭の学習も含め、一首全体の解釈などの練習もしておきたい。
